

第三百五十五回 青葉会

平成二十七年十月二十二日(木) 午後五時半〜八時半 丸紅来客食堂(談話室)

〈顧問〉

☆ 川合万里子 先生

〈選者〉

◎ 川口孤舟

〈出席者〉

今井紀久男 大林猛 小川恭延 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太(選句のみ)
後藤保明 小西弘子 豊田ゆたか 中野一灯 福島正明 星田啓子 山崎亜也 山内天牛
伊賀山そらお 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 古田昇 宮内規雄 渡邊盛雄
安部眞希子 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆 早川允章 村田くに子 山崎青史 山本三恵

〈紙上選句〉

《互選句》

六点

☆ 二親の介護の愚痴聴く温め酒

(☆↓「温め酒兩親介護の愚痴聴き」)

☆ 名月や門を出でたる両隣

(☆…中七↓「門に出揃ふ」)

五点

◎ アンカーの二人が沸かす運動会

☆ 秋しぐれ国境封鎖の町に泊(はつ

(☆…下五↓「町に泊て」)

香はしき焦げ分ち合ふ今年米

四点

☆ そぞろ寒(さむ)銀座の画廊客絶えて

(☆…季語を下五に据えて締めたい「客絶えし銀座の画廊そぞろ寒」)

青春の傷みは癒えず敬老日

☆◎ 秋祭小犬耳立て笛をきく

(☆…小犬を引立てたい「耳を立て笛きく小犬秋祭

虫の音の途絶えししじま訃報きく

(☆…「きく」では説明調になるので「虫の音の絶えし静寂(しじま)訃報かな」)

柿をむく妻の背少し円みおび

◎ 木の実降る辻に子連れの手風琴

芝居観て紅葉明りのラーメン屋

☆◎ 秋晴れや艦列の先は富士の峰

(海上自衛隊観艦式予行)

(☆…富士の峰をより強調したい「艦列の先は富士の峰(ね)秋高し」)

☆ 秋惜しみ寺町辿る人の群(鎌倉にて)

(☆…前書きの町名も句中に入れて「秋惜しみ人々巡る古都の寺」)

☆ 秋晴れて杖を頼みの一巡り

(☆…「り」音で韻を踏むとリズムカルになるので「秋日和杖を頼りの一巡り」)

今年からもう来ぬ林檎友悼む

我が生のあらかた見えし曼珠沙華

青き葉の混る掛稲架(はぎ)二並び

◎ 一駅のすたとんと釣瓶落しかな

☆◎ 長き夜やベストセラーは敢えて避く

(☆…下五↓「敢へて避け」)

秋闌くやニュートリノほどの我が軽さ

☆ 白内障癒えて際やか菊花展

(☆…中七↓「癒え際やかや」)

☆◎ 稲穂波棚田背にして家一戸

(☆…語順を変えて「一軒家稲穂の垂るる棚田負ひ」)

知恵の輪が解(ほど)ける予感澄める水

正明 (弘・啓・亜)

堂哉 (忠・万・龍・青・天・三)

弘子 (猛・孤・ゆ・隆・正)

一灯 (眞・忠・万・允・正)

全 (忠・弘・啓・青・天)

紀久男 (万・龍・允・亜)

孤舟 (猛・忠・隆・亜)

ゆたか (万・孤・保・隆)

全 (万・保・允・啓)

全 (眞・保・敏・灯)

一灯 (万・孤・弘・天)

天牛 (眞・ゆ・灯・正)

そらお (万・孤・青)

全 (敏・允・正)

恭延 (万・允・く)

忠彦 (龍・正・亜)

孤舟 (保・啓・三)

弘子 (五・灯・く)

全 (孤・ゆ・天)

健介 (眞・万・孤)

全 (五・天・三)

堂哉 (忠・万・く)

ゆたか (万・孤・く)

二点

☆ 分け入りて壺中の天や大花野

(☆↓「分け入るや一壺天なる大花野」)

昇 (恭・万・五)

創始者像の禿頭に木の葉降る

全 (眞・忠・青)

秋の暮三の輪で降りる電車かな

亜也 (隆・天・三)

☆◎ 名月や兎はどこと孫尋ぬ

(☆↓「名月や兎は何処と孫が訊き」)

天牛 (猛・万・孤)

恐ろしや原発動く秋岬

紀久男 (恭・正)

南地「大和屋」

秋時雨上方舞のしつとりと

全 (五・敏)

☆ 敬老日祝はる老いの早さかな

(☆↓「老い迅し吾(ち)も祝はるる敬老日」)

恭延 (万・弘)

教會の尖塔赤し秋の坂

全 (隆・亜)

☆ 新蕎麦や新作好きの三代目

鷹渡る好みの風を捉へつつ

忠彦 (眞・万)

島の灯のささやくやふに星月夜

孤舟 (五・ゆ)

(☆: やふに↓やうに)

全 (ゆ・允)

☆ 秋麗らまどろむ老犬いびき良し

(☆: 「いびき」が在るので「まどろむ」は不要「老犬のいびき健やか秋うらら」)

保明 (万・弘)

時代祭長槍(やり)持たされ武者ゆらぐ

全 (恭・弘)

☆ 今年酒小指立て酌む小盃

(☆: 語順を変えてみる「小指立て小盃に酌む今年酒」)

弘子 (正・青)

神無月御祓い必要この地球

一灯 (万・亜)

分け入れば炎の如き山紅葉

正明 (恭・敏)

深山来て黄金(こがね)の棚田人の汗

啓子 (孤・保)

(☆: 「黄金の棚田」|| 稻穂|| 秋の季語。汗と季重なり)

全 (猛・三)

あけび蔓浸す湯棚に浮かぶ月

全 (灯・隆)

(☆: 季重なり)

天高し妻がからかふ無為徒食

天牛 (保・龍)

(☆: 面白けれど川柳っぽいかも...)

盛雄 (紀・敏)

盆東風(こち)や老尼はデモへ車椅子

(寂聴さん安保デモ)

一点

松緑の「髪結新三」

声さやか溜飲下がる新三かな

紀久男 (敏)

夕月は多勢の雲と駆け競べ

猛 (龍)

照る紅葉蓼科高原炎上す

全 (恭)

紅葉のグラデーション割(き)いて炎上す

全 (紀)

名月や天にあたって海明かし

全 (ゆ)

秋の暮帰巢の鳥影樹に消える

恭延 (紀)

雲破れ秋の陽白き玉となる

全 (灯)

スーパームーン皇居一周走り観る

忠彦 (五)

秋虹に濡れパドックの駿馬かな

孤舟 (灯)

酢橘(すだち)あり肴は二の次まず御神酒(おみき)

保明 (猛)

☆ ひめやかに黒猫かさこそ枯葉踏む

全 (万)

(☆: 「ひめやか」「かさこそ」と猫の足音を二重に描写するのは重たい。音そのものは

読み手に想像させるのが上策か...。「黒猫の枯葉踏む音の幽(かすけ)さよ」)

大道芸拙きを愛(め)で秋うらら

恵洲 (く)

酸素ボンベ憂しと師の文やや寒く
暮れ暮れて街灯伝ふ霧の路地
共鳴する宇宙の響き木の実落つ
こぼれ萩砂漠に潜むテロリスト

惠洲 (紀)
一灯 (恭)
正明 (紀)
全 (啓)
全 (万)

☆ 青筋黄黒揚羽達行く季節
(☆…揚羽蝶は夏の季語であるが此の句はいたく混然としてるので整理して「秋の揚羽」を季語として句を成立させてみたい。「青黄黒秋の揚羽の彩豊か」)
わくら葉もいとおしくなる秋の暮
啓子 (紀)

(☆◎…季重なり)

綺羅きらと地球に近し月の面

全 (猛)

柿食へば直ぐ治るとぞ二日酔

規雄 (万)

◎ ☆ 夕映えや土蔵の前の柿たわわ

全 (孤)

心癒ゆ鯛のつみれ味噌仕立て

亜也 (三)

佳き人の頬張る大福丹波栗

全 (紀)

たうなすも万聖節は洋風に

昇 (紀)

(☆…万聖節の前夜ハロウインの主役が「たうなす」
唐茄子₁ 南瓜₂なので季語いっぱいだが…)
まだ老いぬ職場の友ら新酒汲む
天牛 (く)

●次回青葉会

十一月二十六日(木) 午後五時半から八時半 丸紅 コンチエルト(談話室)

▲当季雑詠五句 投句二句

十二月十日(木) 師走恒例寄席見物(末廣亭) 昼の部

正月五日(火) 吉例初芝居総見(歌舞伎座) 昼の部 丸紅 コンチエルト

一月二十八日(木) 初句会 午後五時半から八時半 丸紅 コンチエルト(談話室)

以上文責 紀久男

平成二十七年十月句会報

一、今回は久しぶりの正明さん、五郎太さん(選句のみ)始め14名出席。投句7名。

弘子さん寄贈の坂角の海老煎餅、一灯さんのドイツ土産(チョコレート菓子)、啓子さんの純米酒

「水尾」(野沢温泉)、恭延さんと小生の「米鶴・まほろば」(山形)、忠彦さんの大吟醸「刈穂」

(秋田)等、甘辛の名品を賞味しつつ談論風発。

(一) 弘子さんからの報告: 萬緑全国大会(奈良)に万里子先生が眞希子さん付き添い(下関)東京

へ参加されたこと。(二) 前回紙上選句で三名の方が間に合わなかったこと(三) 英中の

急接近(すり寄り?) (四) 杭打ちデータ改竄での記者会見(五) ラグビーの大金星等々を話題にし

つつ、孤舟選者持参の「俳句四季」11月号(孤舟さん寄稿: カラー二頁。小澤克己ら八名各一句の

鑑賞文)、「俳誌要覧」2015年版、允章さんの「俳人協会・全国俳句大会選句集」(9月朝日ホ

ール)、小生の「歌舞伎俳句歳時記帳」(佐藤吉之輔著。9月・文芸春秋)そして「学術の森の巨人

たち―私の編集日記」(池永陽一著・8月・熊本日々新聞)を回覧。

いつもの猛さんの進行役で御覧のように忠彦さん、一灯さん、ゆたかさん、堂哉さんの四氏が好成績でした。

二 関係者近詠

真白な雨空へ秋の小白蝶	万里子	翳(かげ)りなき平和を念じ大根蒔く	盛雄
路地は早や小川と化して雷とどろ	全	学問と天災の間に猫じやらし	全
秋蚊打ち吾が血たちまち溢れ出し	全	捨てるのか平和ブランドウそ寒し	健介
雨上り蟬の斉唱大合唱	全	野分てふ優雅に非ず洪水来(こ)	紀久男
渋柿に接ぎし甘柿数珠生りに	全	――「きさらぎ句会」10月	
三日月と明星の間(あい)遠火花	全	本陣の影そそり立つ良夜かな	允章
長き夜を彼も彼女も失恋歌	全	白芙蓉ふんはり泛かせ暮れそむる	全
夕立に平気で濡れて明日はオフ	眞希子	鳴高音朝湯の空に響きけり	全
終戦日戦争知らぬてふ負ひ目	全	細腰(さいよう)の様に咲きをり女郎花	全
秋暑しタトウーのかいなに赤嬰抱く	全	山盛りの柿の夕日に売られをり	全
星の夜金魚の水を寝かせおく	弘子	柿盗つ人の幼き一味なりしこと	恵洲
瑠璃の鉢へ琉金移さるる	全	突堤に男ばかりや釣月夜	全
一年生と朝顔の鉢きをつけず	全	盛り上り迫(せり)り上り出水堰を越す	全
音のして後ろの正面桐一葉	全	秋の蚊の小癩(い)千万逃げにけり	全
落蟬を幹にもどせば登りけり	青史	――「大鉄会」10月	
朝焼が衰へゆくよ銀色に	全	モノ展へ秋日の中の長き列	允章
西瓜は食ふほとんど白きところまで	全	柿たわわ奈良には多き仏みち	全
夫はつひに還らざりきと生身魂	全	やせ我慢することなき世秋暑し	彦十
七割は水といふ身の水中り	全	明け方の夢にひっそり秋愁い	全

――「萬緑」―― 十一月号

三 現代俳句協会が60周年記念事業に上梓した「昭和俳句作品年表」(東京堂出版 2014/9/20 ¥2,700)より25句抄出してみました。(年次順)

1 やり羽子や油のやうな京ことば	虚子	13 英霊車去りたる街に懐手	波郷
2 はひまはる五色の火蛾や楽譜書く	友次郎	14 鶏頭のやうな手をあげ戦死(し)んでゆけり	赤黄男
3 ゆく春や写楽を憎む芝居者	岡本綺堂	15 戦信はみじかく虫の句をあまた	爽雨
4 ラグビーの巨軀いまもなほ息はずむ	百合山羽公	16 惨として大英帝国夕焼す	青邨
5 この樹登らば鬼女となるべし夕紅葉	鷹女	17 熊手売る冥途に似たる小路哉	白泉
6 僧をのせしづかに黒い艦が出る	三鬼	18 英霊とゆられまぶしき鱻(ふか)の海	六林男
7 未亡人泣かぬと記者よまた書くか	佐々木巽	19 児の父の征旅をしのぶ夜寒かな	蛇笏
8 秋雨来ぬ重き征衣を重からしめ	しづの女	20 水脈(みぢ)の果て炎天の墓碑を置きて去る	兜太
9 兵の顔あはれ稚(おきな)し汗拭くなど	楸邨	21 てんと虫一兵われの死なざりし	敦
10 母の手に英霊ふるへをり鉄路	窓秋	22 飢せまる日もかぎりなき帰燕かな	楸邨
11 小つづみの血に染まりゆく寒稽古	武原はん	23 何もかもあつけらかんと西日中	万太郎
12 両眼を射貫(ぬ)かれし人を座らしむ	草城	24 焼跡に遺る三和土や手毬つく	草田男
		25 いっせいに柱の燃ゆる都かな	敏雄

平成二十七年十一月十五日

以上
紀久男記